

ムザツフェル・ウレクリ著

クリム・ハン国の建国とオスマン朝保護 下における発展（一四四一―一五六九）

川口 琢司

本書はクリミア半島と南ロシアの草原地帯に存在したクリム・ハン国（一四四一―一七八三）に関して、その成立と発展を実証的に分析した研究書である。著者のウレクリ氏は、現在イスタンブール大学・文学部・史学科の助教授で、本書は同大学に提出された博士論文を骨子としている。氏は一五六九年にクリム・ハン国がオスマン朝と共同で行なったアストラハン遠征を約三四〇年間のクリム・ハン国史の転換点とする立場から、国家形成後の約一三〇年間でハン国の上昇期と位置づけ、この時期のハン国史を本書で扱う対象とされた。

クリム・ハン国はイスラム世界の辺境に位置したが、ロシア・東欧やジェノヴァの植民居留地と国境を接したため、歴史的につねに複雑な国際環境のもとに置かれた。その意味で、本書はクリム・ハン国史のみならず、オスマン朝の北方政策や南ロシアから中央アジアに至る草原史、ひいて

はロシア・東欧史にも一石を投じることは疑いない。また、これまで我が国ではクリム・ハン国史に関するモノグラフの発表はもとより、研究書や論文の紹介さえ皆無であった点を考慮するならば、本書を紹介することにも意義があると思われる。本書の構成は以下のとおりである。

前言・略号一覧・史料と文献目録

導入 クリム・ハン国の建国以前の状況

(a) クリム・ハンたちの起源と祖先

(b) ハジ・ギライ以前の抗争

第一部 クリム・ハン国の建国

(一) ハン国の形成とハジ・ギライ・ハン

(二) ハン国の安定の崩壊（一四六六―一四七八）

(三) クリミアのオスマン朝保護下への加入とハン国の地位

第二部 クリム・ハン国のオスマン朝保護下における発展

(一) クリミアのオスマン朝保護下における初期の時代とメングリ・ギライ・ハン（一四七八―一五一四）

(二) クリム・ハン国に対するオスマン朝の影響力の増大

(a) サードト・ギライのクリミアへのハンとしての派遣

(b) サーヒブ・ギライ・ハンの時代、イスラーム・ギライおよびバキ・ベイとの抗争

(c) サーヒブ・ギライの殺害とデヴレト・ギライの即位

(三) ハン国の政治・軍事力の喪失の始まり

(a) デヴレト・ギライ・ハンの初期の時代とロシアの脅威の発生

(b) アストラハン遠征とロシア人に対するハン国の威力の動揺

第三部 クリム・ハン国の国家組織と社会生活

I 国家組織

(一) 支配組織

(a) ハン

(b) カルガイ

(c) ヌレツェイン

(d) カラチのベイたち

(二) 軍事組織

(三) 財政と諸税

II 社会生活

(一) 都市と都市生活

(二) 草原の生活

(三) 農業

(四) 商業活動

結語・仏文要旨・総索引

導入から第二部までは政治史を、第三部は国制史・社会経済史を扱う。以下、この構成に従って内容を紹介する。

前言では、ハン国がオスマン朝の保護と影響を受けながらどのように国力を発展させていったかを本書の研究テーマとして掲げる。史料と文献目録では個別の史料の紹介を行なうが、この部分は類例がないだけに本書の価値をいやがうえにも高めている。それに関連して、本書の大きな特徴は如上のテーマに必要なオスマン語史料（年代記・文書など）を縦横に利用したことであろう。対照的に、ロシア語文献はその重要性のわりにはほとんど利用されていない。

導入の(a)ではクリム・ハンたちの祖先が扱われる。まず、祖先の名前を確定する作業を行ない、クリム・ハン国の建国者ハジ・ギライがチンギス・カンの長子ジョチの三番目の子トガイ・テムルの九世代の子孫であるとすると、次いで、主な祖先たちの活動を整理し、最後にハジ・ギライは父が金帳ハン国の権力闘争に敗れたためリトアニアに避難したとする。

(b)では一四二〇年から一四三七年までのトガイ・テムル系の子孫による金帳ハン位をめぐる四次の抗争が扱われ

る。そして抗争の当事者ウルグ・ムハンマド・ハンがトクタミシユ系のサイド・アフマド・ハンの登場によりカザンに退く一四三七年までは、金帳ハン国の領内に独立のクリム・ハン国は想定できないとする。

第一部はクリム・ハン国の建国からハン国がオスマン朝の保護下に入るまでの約四〇年間の政治史を扱う。(一)ではハジ・ギライによる建国とその治世が述べられる。ハジ・ギライの命名はギライ部族の有力者がメッカ巡礼から戻ったことに由来するというが、残念ながらこの重要な部族の実態について言及がない。サイド・アフマドのクリミア侵入によりハジ・ギライはシリンド族のもとに逃走したが、シリンド族の支援もあり、一四四一年頃にクリミアの支配者となった。しかしその後、金帳ハン国やジェノヴァの干渉で政治的安定を確保できなかった。

(二)ではハジ・ギライの死後に生じた内訌が扱われる。著者はこの内訌こそがオスマン朝によるカッファ征服とハン国支配の開始という事態の原因になったと指摘する。ハジ・ギライの二子メングリとヌール・デヴレトを中心とするハン位争いの行方を左右したのはシリンド族とジェノヴァの動向だった。とくに、ジェノヴァの行動はメングリがオスマン朝にカッファ征服を呼びかける原因となった。

(三)ではハン国がオスマン朝の保護下に入った経緯とそ

の後の状況がたどられる。一四七五年春にオスマン朝軍がカッファを征服した直後、メングリはオスマン朝の支持で即位した。かくて、その年の夏にはハン国がオスマン朝の支配下に進んで入ったことに疑いの余地はないとする。その後、クリミアに侵入した金帳ハンに敗れたメングリはイスタンブルに呼び戻され、ヌール・デヴレトにハン位を奪われたが、シリンド族がメングリの再派遣をメフメト二世に要求したために復位した。

第二部は復位したメングリの治世からアストラハン遠征までの約一三〇年間の政治史を扱う。(一)では見出しと異なり、メングリとメフメトの治世中の主な事件、ガーズィーの短い治世が考察される。メングリ時代についてはまず、バイエズイド二世と対立してケフエ(カッファ)に逃亡した王子セリムとの関係が説明される。メングリはセリムをオスマン朝の次期スルタンの最有力候補とみて支持したが、息子メフメトはセリムを敵視した。一五〇二年のメングリによる金帳ハン国征服については、具体的経緯がまったく触れられておらず、物足りなさを感じる。制度面では、ハンの後継者カルガイの職位が創始され、オスマン朝がこの職位を公式に承認したことが述べられる。次のメフメト時代にはオスマン朝のハン国への影響力は希薄だったという。金帳ハン国の再統一を試みた結果、クリム・ハン

国の領土はドナウ下流域からヴォルガ川までの広大な地域に広がった。最後に、シリム部族の要請でガーズイー（メフメトの息子）の代わりにメングリの息子サーデトがイスタンブルからハンとして送られたことが触れられる。

(二)の(3)ではサーデトの治世が考察される。これまではハンは有力部族のベイの提案とオスマン朝スルタンの承認で決定していたが、サーデトは人質としてイスタンブルに滞在するハン位候補者がハンに指名された最初の事例である。サーデト時代はスレイマンの治世の初期に相当し、クリム・ハン国はオスマン朝への北や東からの危険に対する安全弁として再び注目されるようになったという。サーデトは兄弟イスラームとの抗争に敗れ、再びイスタンブルに戻った。まもなくオスマン朝はイスラームを退位させ、諸部族の要請もあって、人質のサーヒブをハンとしてクリミアに送り、イスラームをそのカルガイに任命した。

(b)ではサーヒブの治世の前半が考察される。とりわけ、イスラームやノガイ・マンギト部族のバキ・ベイとの抗争が詳述される。イスラームとの抗争では、ハン国の諸部族がサーヒブ側とイスラーム側に分かれて抗争を長期化させた。著者はこの抗争における諸部族の役割を重視する。サーヒブはノガイのバキ・ベイの力でイスラームを除いたが、ノガイはハン国の支配に従わない厄介な存在だっ

た。そのため、サーヒブはノガイを半島内に定住させることに努めた。その後、オスマン朝の要請を受けてモルドヴァ遠征に参加し、チエルケス遠征・ロシア遠征を敢行した。しかし、ロシア遠征はバキ・ベイの不穏な行動により失敗に終わった。そのため、サーヒブは奸計を弄してバキ・ベイを殺害させた。

(c)ではサーヒブの後半の治世が扱われる。バキ・ベイ殺害後、サーヒブはチエルケス、カバルダ、アストラハン方面に積極的な遠征を行ない、大きな成果をあげた。しかし、このような独立的な行動と成功は、スレイマン時代の大宰相ルステム・パシャとの対立、イラン遠征への援軍要請の拒否とともに、サーヒブに対するオスマン朝の信頼を失わせる原因となった。サーヒブは甥のデヴレトが人質としてイスタンブルにいることに大きな不安を感じていたため、カザン・ハンの死去に伴い、デヴレトをカザンにハンとして送るようスルタンに求めた。ここにおいて、スレイマンはサーヒブを廃位してデヴレトを即位させることに決めた。うわべは彼をカザン・ハンに任命してクリミアに送った。サーヒブがチエルケス遠征に出ている間に、デヴレトはバフチェサライでハンを宣言し、サーヒブに追討軍を送った。サーヒブはチエルケス遠征の帰途に部族軍に見捨てられ、追討軍により殺害された。

(三)の(a)ではデヴレトの治世の最初の一〇年間が考察される。ここで注目すべきはモスクワ・ロシアによるカザン・ハン国とアストラハン・ハン国の征服である。デヴレトは両ハン国を守るために遠征したが、いずれも失敗に終わった。

(b)ではアストラハン遠征までのデヴレトの約一〇年間の治世が扱われる。とくに、アストラハン遠征は内容の詳細さにおいて第二部の圧巻である。この遠征は、ロシアのカフカス進出、ロシアによる巡礼者の圧迫、チェルケス、ノガイのロシアへの不満などが原因でオスマン朝により計画された。しかし、デヴレトはオスマン朝がアストラハンに進出すれば、ハン国がオスマン朝の一州になるとして遠征の実現に消極的だったうえに、遠征計画をモスクワに漏らした。遠征の帰途にオスマン朝はロシアのために大きな人的損害を被り、かくて遠征は大失敗に終わった。

第三部Ⅰ(一)支配組織ではまず制度史上の大きな特色として、クリム・ハン国の初期の国家組織は金帳ハン国の組織の骨格とあまり変わらなかったが、オスマン朝の支配が及んでくると、オスマン朝の組織に関わる階級・職位・制度がハン国の国家組織に入ってきたこと、その場合、イスタンブルで人質生活を経験したメングリとサーヒブが大きな役割を果たしたことが指摘される。

(a)ハンハジ・ギライの子孫から選ばれ、一般にオスマン朝スルタンの指名で即位したが、スルタンにより勝手に廃されることはなかった。スルタンはハンに任命書(ハカン証書)、旗、トグを与えた。ハンは貨幣の鑄造、勅令(ヤルリク)の発布の権利を有し、モスクの説教ではオスマン朝スルタンに続いて名前が読み上げられた。ハンはオスマン朝の位階ではスルタンと大宰相に次ぐ三番目の地位を占めた。そのため、オスマン朝との共同遠征では、オスマン軍の指揮官が誰であるかにより、ハン、カルガイ、他の王子のいずれかがハン国軍を指揮した。

(b)カルガイはメングリ時代、すなわちオスマン朝の支配時代の初期に創始された職位である。それはハンの長男、もしくはハンの弟や甥に与えられ、象徴的な地位ではなく、遠征や歓迎式典を指導する活動的な地位だった。半島とキプチャク草原を結ぶオル・カプでノガイの半島侵入を阻止してこれを支配下に置くことに努めた。半島中部のアクメスジドが本来の任地だった。

(c)ヌレッディンは第二の後継者を意味し、ハンとカルガイに続く第三の職位であった。ただし、この職位は本書の対象外であるセミズ・メフメトの時代(一五七七一五八四)に創始された。カルガイが遠征に出た時にその代理をつとめ、カルガイがハンになることでカルガイの地位に

上昇した。

(d)カラチは金帳ハン国にも存在した職位であり、部族の指導者から構成された。ハン国の初期にこの職位を占めたのはシリン、バリン、アルグン、キプチャクの四部族のベイだったが、時代とともにスイジウトのベイとマンギト(ノガイ)のミルザーたちがアルグンとキプチャクのベイに取って代った。とくに、シリン部族のベイたちは重用され、ハンの一族と姻戚関係を結んだため、筆頭カラチの地位を保持した。

(二)軍事組織ではまず、クリム・ハン国が金帳ハン国に起源を持つため、金帳ハン国の軍事構造と軍隊が概観される。軍隊編成については、先鋒軍→シリン、左翼→アルグン、バリン、キプチャク、右翼→カルガイとノガイ、マンギト、スイジウト、中軍→ハン、王子たち、ケフェのサンジャク・ベイ麾下の砲兵部隊と銃兵部隊、という布陣が紹介される。著者は軍事遠征としてハンやケフェのサンジャク・ベイも参加した遠征、カルガイがハンの代理として初秋と晩冬にロシアに行なった襲撃・掠奪を目的とした遠征の二種類を指摘する。どちらの場合も、軍隊の集合場所はオル・カプだった。著者はハン国軍の規模を最大で六〜七万人と推定する。

(三)財政と諸税ではまず、ハン国の財政は御前会議(デ

イヴァーン)で決定され、財政長官と財務官(ハズイネタール)が実施に移したことが指摘される。続いて、税目と収入が列挙される。オスマン朝はハン国の財政を様々な方法と理由で援助した。ハン国の国土と住民がハンの一族などにティマールとして分配された点はオスマン朝の領土支配との結びつきや類似を示す。最後に、サーヒブが一種の財政改革を行ない、私的な財庫を創出しようとしたことに言及する。

II(一)都市と都市生活。クリミアでは都市の起源がかなり古く、交易により活況を呈し、北からの脅威には一種の避難場所の役割を果たしたとする。クルク・イエル(チフト・カレ)、古クリム(ソルハト)、都バフチエサライ、古ユルト、サラジク、アクメスジド、ギョズレヴェ、オル・カプ、カラスバザルなどの都市の住民構成、建築物等に言及する。

(二)草原の生活。ハン国はジェノヴァやオスマン朝が支配する半島南岸から北の草原地帯を領有した。住民はそこで夏营地と冬营地の間を季節移動する生活を送った。自然条件は牧畜の発展を促し、畜産品の製造や皮革が行なわれた。

(三)農業。滞在と移動を繰り返す住民たちは農業にも従事した。ティマールの存在はクリミアで農業が発達したこ

とを競わせる。一方、南ロシア草原では小麦が生産され、大部分がオスマン朝の諸都市に輸出されていた。半島南岸では果樹と野菜が大量に栽培された。クリミアの蜂蜜はイスラム世界で愛好されたという。

(四) 商業活動。ハン国は東西と南北の交易路上にあり、半島沿岸の諸港は東西と南北を連絡していた。著者はクリミアとアナトリアの交易に注目し、アナトリアからクリミアへの重要な輸出品として綿織物や綿製品、クリミアからアナトリアへの重要な輸出品として奴隸(チュルケス、ゲルジア、カザン・タタール人など)を挙げる。小規模な手工業も見られ、アヒーが組織された。

最後に以上の諸点をふまえ、クリム・ハン国のオスマン朝への依存は周辺諸国にハン国の強さを印象づけ、アストラハン遠征まではハン国をキプチャク草原や東欧で最強の国家にしたが、モスクワ・ロシアによるカザン、アストラハンの征服はハン国に深刻な打撃を与え、アストラハン遠征の失敗はハン国の発展を終焉させ、ハン国の一つの時代に終止符を打ったと結論する。

本書はオスマン史料を中心にすえてクリム・ハン国前期の政治・制度・社会生活に対するオスマン朝の影響を解明しようとした意欲的な研究であり、このテーマに関する一つの高い到達点を示している。もちろん今後は時代を下げ

て、クリム・ハン国後期に関する同様の研究が進められ、前後期のクリム・ハン国の多面的な比較が実現されるよう望むのはいうまでもないことである。しかし同時に、ロシア・東欧のクリム・ハン国関係史料の利用を痛感させられる。というのも、その一部を利用してハン国の有力部族の役割を検討した研究に見られるように⁽¹⁾、これらの史料はクリム・ハン国の新たな側面を照らし出す可能性を秘めているからである。その意味で、これらの史料たとえばA・ベニグセンらが紹介したトプカプ宮殿博物館古文書館所蔵の新出のオスマン文書⁽²⁾を対照させるならば、クリム・ハン国の国家構造の性格がより鮮明になるものと思われる。

Muzaffer Ürekli, *Kırım Hanlığının Kuruluşu ve Osmanlı Himayesinde Yükselişi (1441-1569)*. Ankara, 1989.

註

(1) B. F. Manz, *The Clans of the Crimean Khanate, 1466-1532*, *Harvard Ukrainian Studies*, vol. 2, no. 3, 1978, pp. 282-307.

(2) A. Benmisen et autres, *Le Khanat de Crimée dans les Archives du Musée du Palais de Topkapı*, Paris, 1978.